鹿児島大学医学雑誌　第47巻　補冊1　89～92頁　平成7年8月
Med J Kagoshima Univ, Vol.47, Supplement 1. 89 ～ 92, August, 1995

W・ウィリス（William Willis）と私

中須賀　哲　朗

Dr. Willis in Japan 1862－1877の翻訳者

Dr. W. Willis and I

Tetsuro NAKASUGA

Translator of Dr. Willis in Japan 1862－1877

「まるでウィリスの背後にあなた自身を見るような気がしました」と，私の訳書『ある英人医師の幕末維新――W・ウィリスの生涯』（中央公論社，昭和60年）が出版された時，そのように年輩の友人が読後感を述べられたことがあった．私は一瞬その言葉の意味をとりかねたが，ウィリスの書簡や報告文を組み合わせて編んだサー・ヒュー・コータッツィ氏（Sir Hugh Cortazzi）の著作Dr Willis in Japan――British Medical Pioneer 1862-1877を翻訳した文章に，いくらかでも訳者の共感を読みとっていただいたものと思う．私はウィリスの人間性に強く惹かれ，彼との10年ぶりの邂逅とも言えるその訳業に無我夢中の精力を傾けたのである．かつてウィリスの3ヵ月にわたる戊辰の東北戦争従軍記を訳出して，『英国公使館員の維新戦争見聞記』（校倉書房，昭和49年）を上梓して以来すでに10年の歳月が流れていた．その日本文への翻訳は，ウィリス研究の先駆者鮫島近二博士のかねてからの宿願であった．しかし，その5年前に博士は急逝され，たまたま私が先生の遺志を受けつぐ形となったが，その経緯は先生の遺稿集『明治維新と英医ウィリス』（私家版，昭和48年）のあとがきにふれられている．

1868年（慶応4＝明治1）の秋，東北地方における新政府軍と北越同盟軍の戦争が熾烈をきわめるにつれ，西洋外科医従軍の必要性を痛感した大総督府の要請に応えて，その年1月1日から江戸副領事の職にあったウィリスは，急きょ高田（上越市）・柏崎・新潟・新発田・会津若松へと困難な巡回の旅をかさねた．そして，各地の軍陣病院で大勢の傷病兵を治療するかたわら，それぞれの土地の風景・庶民生活・文化・政治経済・産業・戦局の動向・医療活動などを冷徹な科学者の目を通して詳細に記録し，北越の最新情報を江戸の公使H・パークス（Harry S. Parkes）に送ったのである．それらの記録文はまたパークスから本国の外務次官ハモンド（Edmund Hammond）あてに半公信の同封文書として送られ，現在もなおイギリスの国立公文書館の外務省旧蔵対日一般外交文書および付録（General Correspondence, Japan, with Supplement. FO46）の一部として保管されている．私が『英国公使館員の維新戦争見聞記』に訳出したのは，パークスの急送公文書（デスパッチ）と半公信，従軍中のウィリスからパークスにあてた手紙，および各地におけるウィリスの記録の全文であった．

幕末維新期に果たしたウィリスの業績に日本医学史の面から光をあてたのが，さきの鮫島近二博士の『明治維新と英医ウィリス』，佐藤八郎博士の『英医ウィリアム・ウィリス略伝』（昭和43年）・「英医ウィルスと近代日本医学」（『医学選粋』25号別冊，昭和56年），尾辻省悟博士の「日本医学の黎明期に生きた英医ウィリアム・ウィリス」（『日本医事新報』277号，昭和52年），それに森重孝博士の『薩摩医人群像』（春苑堂書店，昭和51年）など，鹿児島出身の医学者による丹念な労作であった．

一方，政治史の立場から研究の先鞭をつけられたのは，もと東京大学教授岡義武氏である．はやくも第2次世界大戦勃発前，氏はイギリス留学中にロンドンの国立公文書館において厖大な量の外交文書のなかからウィリスの東北戦争従軍記録に目をとめ，その主要な部分を筆写して『黎明期の明治日本』（未来社，昭和39年）にその史料的意義を明らかにされた．また，もと東北大学教授石井孝氏は，おなじくウィリスの記録を用いて「一外人のみた会津藩の終末」（『日本歴史』188号，吉川弘文館，昭和39年）を発表し，百姓一揆の荒れ狂う落城後の会津若松の物情騒然たる空気や，藩主松平容保父子の護送を見送る者とてない民心の離反ぶりを紹介して反響を呼んだ．そして，作家の司馬遼太郎氏は，蘭方医の活躍を軸に江戸身分制社会の崩壊過程を描いた長篇小説『胡蝶の夢』（新潮社，昭和54年）のなかに，特異な存在価値の光芒を放つ西洋外科医ウィリスを登場させたのである．

しかし，なんといってもウィリスの日英外交史上に残した足跡をもっとも鮮明に評価したのは，歴史家萩原延寿氏である．氏もまたロンドンの国立公文書館においてアーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow）の書簡・日記・覚書な

どを調査されていくうちに，サトウの親友ウィリスが本国の長兄ジョージ・ウィリス（George Willis）夫妻に書き送った200余通の手紙や鹿児島医学校当時の臨床記録などの所在をつきとめ，ついに所有者である長兄の孫フランシス・アームストロング＝ウィリス夫人（Frances Armstrong-Willis）からそれらの寄贈を受けた．そして，サトウの日記を縦糸とし，イギリス・フランス・アメリカの対日外交文書やウィリス書簡などの貴重な史料を横糸に織りまぜて，疾風怒涛の明治維新期における内外の人間模様を綿密に描写し，『遠い崖』の題名のもとに「朝日新聞」の1976年（昭和51）10月12日付から1990年（平成2）12月25日付まで実に1,947回にわたって連載されたのである．

もと駐日英国大使サー・ヒュー・コータッツィ氏がDr Willis in Japanの執筆の資料としたのが，萩原延寿氏によって発見されたウィリス書簡であった．さきにウィリスの東北戦争従軍記を訳出したのが機縁となって，私はコータッツィ氏の大使在任中にその草稿を見せていただいたのだが，A4判447枚にびっしりと書き込まれたタイプ原稿を読み終えた時，ウィリスのやや悲劇的色彩を帯びた生涯の全貌を知りえたものの，はるかな故国の長兄夫妻に書き送った私信の引用がその背景の考証的説明によって裏付けられていないために，一般読者には曖昧模糊たる印象をあたえかねなかった．日本の文献によって補足せねばならぬ個所も少なくない．私はそのことを婉曲に申しあげた．そして，定年を迎えたコータッツィ氏のお別れパーティ終了後，327ページに改訂された原稿を受けとり，日本の読者を念頭において翻訳するようにと依頼されたのであった．

もともと私は歴史の学究ではない．しかし，折りにふれて系統もなく読む文芸作品のある一篇が心に残るように，歴史の流れに作用し作用されつつ生きた人の一生にも，また文芸作品と変わらぬ興味を惹かれるのである．誠実であるがゆえに悲劇的色彩のつきまとうウィリスは，そのような心をとらえて離さぬ魅力があった．

私は小学校1年から中学校2年までの敏感な発育期を支配民族として植民地で送った．敗戦後に引揚げた故郷は，まだ江戸時代の名残りを色濃くとどめた瀬戸内海の島の閉鎖的な農村で，深刻な食料難や住宅難にあえいだ昭和20年代の日本社会では比較的裕福なほうであったろう．萩原延寿氏が実地を探訪して言われるように，北アイルランド西部の田園地帯に残るウィリスの生家は，「泥土でかためた納屋といったふぜいの，ただ貧しい生活のにおいがどこにもしみついているような粗末な小屋」であった．それにくらべれば，3世代夫婦が暮らす昔風の大規模な私の家は，伝統的な日本農村を支配した旧秩序が重くのしかかっていた．解放的な南国の植民地に育った私は，この仏教の因習濃厚な家風に，それにまた周囲の日本人そのものにさえ強い違和感をおぼえた．島には通うべき中学校すらなかった．やむなく本土にあった遠い親戚の家のせまい1室を借りて通学し，ちょうどウィリス少年が「学校から帰るといつもひとり薪で火を起こし，浅い陶器の鍋でひき割りのからす麦や馬鈴薯を煮てたべた下宿生活」そっくりの中学時代を送ったのである．貧しい借地農の家に生れたウィリスにとって学校に行くことは一種の罪悪であった．同様に，家族のすべてが労働にあけくれた農村をはなれて都会の学校に通う身には，少年の心にも絶えず慙愧の念がつきまとうものだ．それでも学制改革を機に，私はあえて上京した．入学した高等学校の教室から隣りに空襲で瓦解した旧陸軍病院の広漠たる廃墟がひろがり，夜のネオン街にあふれた群衆はあてもなくさまよう戦災難民の流れにみえた．厳重な食料統制のためにだれもが飢えていた．

18世紀の60年代からはじまるイギリスの産業革命は，「世界の工場」たる実力を背景に工業製品を輸出して繁栄を謳歌した．綿工業の機械化をバネに関連産業の大工業化がすすみ，国内に借地農民から地代を取る貴族地主と，賃労働者を雇用して生産利潤を追う資本家，それに労働力を売って賃金を得る労働者の3大階級からなる資本主義社会が成立する．旧来の自作農の賃金労働者化によって，農業技術の発達や耕地面積の拡張にもかかわらず，イギリスはいつしか穀物輸出国から輸入国に転換していた．そこへ大飢饉が襲い，「飢餓の40年代」がはじまったのである．1845年から4年間，イギリスは未曾有の天候異変にみまわれ，馬鈴薯の枯渇したアイルランドでは総人口820万人のうち約100万人が餓死したりアメリカへ脱出したりしたのであった．ウィリスが8歳から11歳までの時である．みずからも言っているように，ウィリスが浪費を憎み蓄財に心がけたのも，幼くして「飢餓の40年代」を体験した恐怖心と家庭の貧困に起因していた．東北戦争従軍記のなかで，「この旅行の道すがら，目もあてられぬ卑しい貧乏というものを一度も目撃したことがない．乞食さえ一人として見かけられなかった」と，くりかえし日本の地方都市を賛美しているが，貧困を憎悪する心は後年までも消えることがなかったのである．

ウィリスはエジンバラ大学を卒業して3年後に，開港したばかりの極東の日本に職を求めて奔走するのだが，その主たる動機は江戸の公使館補助官兼医官の高額な年俸（500ポンド）にあったといえるだろう．その当時，イギリスの労働者の平均年収は50ポンド前後にすぎない．経済学者コクーン（P. Colquhoun）の著書A Treatise on the Wealth, Power, and Resources of British Empireによれば，19世紀初頭における年収30ポンドから70ポンドまでの労働者数は総人口の59パーセントを占めていた．さらに最下層の浮浪者・救貧法適用者が11パーセントで，この2階級だけで総

人口の7割にあたる．ちなみに地主階級を形成する貴族およびジェントルマン（准男爵・ナイト・地方ジェントリなど）の階層はわずかに1.39パーセント．かれらがシルクハットにステッキという英国紳士のイメージの代表者であった．そして平均的都市労働者といえば，スラム街に密集したコテジという煉瓦造りの2階建てか3階建ての狭い一室に，週3，4シリングの家賃を払って生活していたのである．したがって，年収500ポンドといえば，産業革命によって勃興した中産階級に比較しても遜色がない．また，経済学者バンクス（J. A. Banks）のProsperity and Parenthoodによれば，1851年の年収200ポンド以上の公務員総数19,044人中，年収500ポンド以上の者は4,031人，21.2パーセントであったから，英国在外公館職員の年俸に貧困からの脱却を願うウィリスがあこがれたのも無理からぬことといえよう．しかし，ウィリスはけっして吝嗇家でなかった．会津藩の病人を収容した施設のあまりに悲惨な状況を見て，彼は自分の所持金140ドルをすべてそそぎ込み，「わずかなお金が非常に役立つところで，これ以上使えるお金がなかったことは，私にはいかにしても残念でならなかった」と言っているのである．

しかし，公使館補助官兼医官の地位は，領事部門であって外交部門ではない．オールコックやパークス，それにアーネスト・サトウは領事部門の出身でありながら外交部門の公使にまで昇進したが，それは英国外務省が非ヨーロッパ地域にのみ適用した例外的措置であった．両部門のあいだには階級差のへだたりが厳然と存在していた．たとえ年へて横浜領事になったとしても，その序列は新任の若い公使館二等書記官の下位に立たねばならなかった時代である．後年，ウィリスはまじめな勤務ぶりを買われて公使館一等補助官兼会計官に昇進するが，個人の経済的問題は解消したものの，やがてこの制度上の差別に悩むようになった．彼が横浜外人居留地に薬局の開業を計画したり，明治政府成立後に東京医学校兼大病院に転出したのも，その原因のひとつは狭い組織のなかでの階級差別から解放されたかったからだろう．徳川幕府は鎖国によって江戸身分制社会を完成した．今日，わが国は儒教道徳的な身分意識が希薄になったとはいえ，まだ人を評価するのにその業績や人格によってではなく，貧富の差や社会的地位の象徴たる肩書をよりどころとしがちである．管理職の地位やそれと対立的な労働組合主義を好まぬ私は，中途退職を機会に肩書を消した名刺を作り，一種のはかり知れぬ爽快感を味わった．敗戦後の植民地において，被支配民族であった現地の住民が戦前と変わらぬ対等の友誼を示してくれたことが，私の人間形成の糧となっていた．

最後に，ウィリスが解決しえぬ問題がひとつ残る．それは彼がアイルランド出身者であったことだ．日本人には同一国内の民族的抗争など想像もつかぬことだろうが，それには歴史的宗教的背景がある．5世紀中葉以降のゲルマン民族の大移動によって，ユトランド半島やドイツ北西部を原住地とするその一派アングロ・サクソン族がブリテン島に侵入し，原住民のケルト族を辺境のアイルランド島やスコットランド，ウェールズに追った．そのアングロ・サクソンを根幹とする現在のイギリス国民と，かれらの支配に抵抗するアイルランド人の民族独立運動が血なまぐさい衝突をくりかえし，アイルランド人が島の東北部を除いて完全にイギリスの統治下を脱したのは，さきの第2次世界大戦が終って4年後の1949年（昭和24）であった．

ウィリス家の先祖は16世紀末にイングランドから北アイルランドに移住したといわれる．しかし，それも確かな証拠があるわけでなく，ウィリス自身はアイルランドに強い愛着を持ち，日本滞在のきわめて凡俗なイングランド人——彼はイギリス人 the British ではなく特にイングランド人 the English と言っている——が誇り高い日本人にたいして尊大な支配者の態度をとることに厳しい批判の目を向けた．「先頭には大君（タイクーン）が，しんがりには天皇（ミカド）がいるような行列の中でさえ，とるに足らぬイングランド人であっても平気で馬を走らせるのではないか」と，生麦事件に関連して述べている．一般に自国をはなれて遠い異郷に暮らす者は強い郷土意識を呼び起こすものである．公使館での彼の鬱屈した心は，まわりのイングランド出身者にたいするコンプレックスが作用していなかったとは断言できない．

しかし，民族的な差別意識に抵抗したウィリスは，それがだれであろうと弱者や敗者にたいして親身な援助の手をさしのべた．たとえば鳥羽・伏見の戦に敗れて大阪湾口に避難した会津藩兵の治療や，有名な神戸事件の流れ弾にあたって倒れた老婆へのいたわりを見よ．「日本人がだれひとりとしてその被差別賤民の老婆に近寄ろうとしない時，ウィリスは彼女を連れてきて，両足のくるぶしの貫通銃創を治療してあげたのである．」（A. B. Mitford, The Memoirs and Recollections, 1866-1906.）

このようなウィリスの態度は，けっして気まぐれな慈善行為ではなかった．大総督府の要請に応えて東北戦争に従軍した時も，彼は敵方の捕虜を無差別に殺戮することを禁止させ，会津若松の落城後，城南の御山村軍陣病院で敵味方を問わずに治療をほどこしたのである．鹿児島医学校に赴任後も，彼は梅毒患者やハンセン病患者の悲惨な症状から目をそむけることができなかった．数度にわたってそれらの患者の隔離病棟設立を県当局にたいして強く要請したのだが，県当局がウィリスの勧告に応じたかどうか，残念ながら私はいまだに確認するにいたらない．ハンセン病患者が古代以来蛇蝎（だかつ）のごとく忌み嫌われたことは，神前に唱える祝詞（のりと）をはじめ古典文学にもしばしばあらわれ，近代になってもその

容貌がぞっとするほど醜怪な患者は世間から徹底的に迫害されたのであった．

さる1993年（平成5）4月，日本のハンセン病患者救済に生涯を捧げたイギリス人ミス・ハンナ・リデル（Hannah Riddel）と姪のミス・エダ・ライト（Ada Wright）両女史の記念祭が，熊本市総合女性センターでひらかれた．その両女史の伝記執筆にとりかかられた英国大使夫人レディ・ボイド（Lady Boyd）を少しばかりお手伝いした時，リデル女史の熱心な警醒によってはじめて日本政府が動いたことを知り，私は内心赤面したのである．ウィリスもまたハンセン病患者の治療に試行錯誤を重ねた．もし鹿児島県当局がウィリスの勧告に応じていたならば，当然かれの管理下におかれる隔離病棟は，キリシタン大名小西行長の例は別として，近代日本におけるハンセン病患者救済施設の嚆矢となったことだろう．

ウィリスは鹿児島の地に日本最初のイギリス流臨床医学の種を播いた．そしてその種は，数多くの指導的人材を派生し，今日の鹿児島大学医学部に発展を遂げた．1991年（平成3）5月，私は妻とともに鹿児島を訪れ，医学部附属病院横のさわやかな新緑に包まれた丘に立つウィリス頌徳記念碑を仰ぎ見た．これまでにも幾度か引用したことのあるその碑文を読みながら，さまざまにウィリスの人柄を偲んだのである．